

先人は知っていた

東日本大震災に伴う

津波で大きな被害を受けた仙台平野で、浸水域の先端が、江戸時代の街道と宿場町の手前に沿って止まっていることが、東北大の平川新教授（江戸時代史）の調査で確認された。仙台平野は400～500年おきに大津波に見舞われており、街道は過去の浸水域を避けて整備された可能性が高いという。平川教授は「先人は災害の歴史

歴史街道 浸水せず

に極めて謙虚だった」と話し、今後の復旧計画にも教訓を生かすべしと提言する。きだと言言する。図に、平野を縦断する奥州街道と浜街道を重ねたところ、道筋の大

津波浸水図
名取市・岩沼市沿岸



亘理町・山元町沿岸



※東北大学防災科学研究拠点事務局の資料・国土地理院航空写真を基に作製

仙台平野 津波経験生かし整備か

部分と宿場町が浸水域の先端部からわずかに外れていたことが分かった。宿場町の整備後に仙台平野を襲った慶長津波（1611年）では、伊達領で1783人が死亡したとの記録が残る。平川教授は「慶長津波を受けて宿場町を今の位置に移したとも推察できるが、今回の浸水域と比べると見事なほどに被害を免れる場所を選んで道敷いた可能性は高い」と指摘する。同平野は明治以降も繰り返す津波に見舞われた三陸海岸と比べ、津波被害の頻度が少ないとされる。慶長津波の浸水域は明らかになっていないが、内陸約4kmの山のふもとまで3人が死亡したとの記録がある。東北大の別の研究チームによれば、今回の津波は海岸線から最大5m程度に達し、平安時代の貞観地震（869年）の浸水域をやや上回った。平川教授は「残念ながら明治以降の開発において、津波の経験は失われた。復興のまちづくりは災害の歴史を重視して取り組んでほしい」と話している。

【八田浩輔】